



A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

8

田山花袋
岩野泡鳴
近松秋江

中央公論社

田山花袋
岩野泡鳴
近松秋江

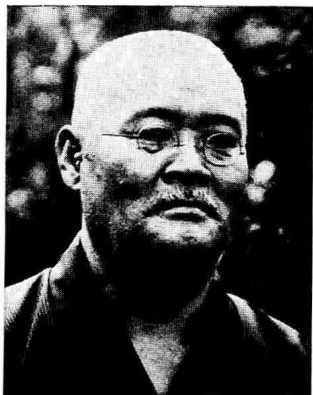
昭和45年4月25日初版印刷
昭和45年5月5日初版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34



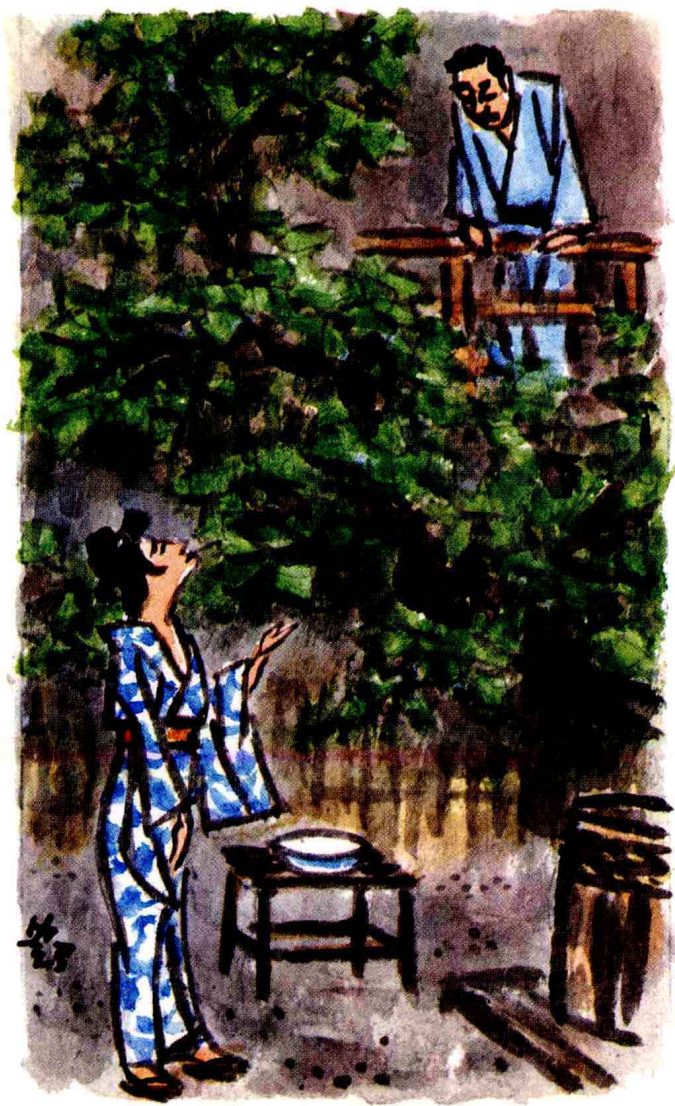
田山花袋 昭和2年ごろ



岩野泡鳴 大正8年



近松秋江 昭和9年



「耽溺」 石井鶴三画

目次

田山花袋

蒲団

生

岩野泡鳴

耽溺

毒薬を飲む女

近松秋江

231 171

56

うつり香

再婚

黒髪

狂乱

霜凍る宵

注解

解説

年譜

口絵
挿画

〔耽溺〕

〔蒲団〕

平野謙

石井鶴三
勝田哲

327

376

389

414

454

499

509

534

「生」

石井柏亭

橋本邦助

和田三造

結城素明

石井鶴三

直原玉青

「耽溺」「毒薬を飲む女」

「うつり香」「黒髪」「狂乱」

「霜凍る宵」

田
山
花
袋

一

小石川の切支丹坂から極楽水に出る道のらたら坂を下りようとしてかれは考えた。「これで自分と彼女との関係は一段落を告げた。三十六にもなつて、子供も三人あつて、あんなことを考えたかと思つと、馬鹿馬鹿しくなる。けれど……けれど……本當にこれが事実だらうか。あれだけの愛情を自身に注いだのは単に愛情としてのみで、恋ではなかつたらうか」

数多い感情ずくめの手紙——二人の関係はどうしても尋常ではなかつた。妻があり、子があり、世間があり、師弟の関係があればこそあえて烈しい恋に落ちなかつたが、語り合う胸の轟き、相見る眼の光、その底には確かに凄じい暴風が潜んでいたのである。機会に遭遇しさえすれば、その底の底の暴風はたちまち勢いを得て、妻子も世間も道徳も師弟の関係も一挙にして破れてしまふで

あろうと思われた。少くとも男はそう信じていた。それであるのに、二、三日来のこの出来事、これから考えると、女は確かにその感情を偽り売つたのだ。自分を欺いたのだと男は幾たびも思った。けれど文学者だけに、この男はみずから自分の心理を客観するだけの余裕をもつていた。年若い女の心理は容易に判断し得られるものではない、かの温かい嬉しい愛情は、単に女性特有の自然の發展で、美しく見えた眼の表情も、やさしく感じられた態度もすべて無意識で、無意味で、自然の花が見る人に一種の慰藉を与えたようなものかも知れない。一步を譲つて女は自分を愛して恋していたとしても、自分は師かの女は門弟、自分は妻あり子ある身、かの女は妙齡の美しい花、そこに互いに意識の加わるのをいかんともすることは出来まい。いや、さらに一步を進めて、あの熱烈なる一封の手紙、陰に陽にその胸の悶えを訴えて、ちよつと自然の力がこの身を圧迫するかのようになり、最後の情を伝えて来た時、その謎をこの身が解いてやらなかつた。女性のつつましやかな性として、その上になお露わらに迫つて来るものがどうして出来よう。そういう心理からかの女は失望して、今回のようなことを起したのかも知れぬ。

「とにかく時機は過ぎ去つた。彼の女はすでに他人の所有だ！」

歩きながらかれはこう絶叫して頭髪をむしった。

縞セルの背広に、麦稈帽、藤蔓の杖をついて、やや前のめりにだらだらと坂を下りて行く。時は九月の中旬、残暑はまだ堪えがたく暑いが、空にはすでに清涼の秋気が充ち渡って、深い碧の色が際立って人の感情を動かした。肴屋、酒屋、雑貨店、その向うに寺の門やら裏店の長屋やらが連なつて、久堅町の低い地には数多の工場の煙筒が黒い煙を漲らしていた。

その数多い工場の一つ、西洋風の二階の一室、それがかれの毎日正午から通うところで、十畳敷ほどの広さの室の中央には、大きい一脚の卓が据えてあつて、傍に高い西洋風の本箱、この中にはすべて種々の地理書が一杯入れられてある。かれはある書籍会社の囑託を受けて地理書の編輯の手伝いに従つていたのである。文学者に地理書の編輯！かれは自分が地理の趣味をもつていながらと称して進んでこれに従事しているが、内心これに甘んじておらぬことは言うまでもない。後れがちなる文学上の閱歴、断篇のみを作つていまだに全力の試みをする機会に遭遇せぬ煩悶、青年雑誌から月ごとに受ける罵評の苦痛、かれみずからはその他日成すあるべきを意識してはいるものの、中心これを苦に病まぬわけには行かなかつた。社会は日増しに進歩する。電車は東京市の交通を一変させた。女学生は勢力になつて、もう自分が恋

をしたころのような旧式の娘は見たくも見られなくなつた。青年はまた青年で、恋を説くにも、文学を談ずるにも、政治を語るにも、その態度がすべて一変して、自分らとは永久に相触れることが出来ないように感じられた。で、毎日機械のように同じ道を通つて、同じ大きい門を入つて、輪転機関の屋を撼かす音と職工の臭い汗との交つた細い間を通つて、事務室の人々に軽く挨拶して、こつこつと長い狭い階梯を登つて、さてその室に入るのだが、東と南に明いたこの室は、午後の烈しい日影を受けて、実に堪えがたく暑い。それに小僧が無精で掃除をせぬので、卓の上には白い埃がざらざらと心地悪い。かれは椅子に腰を掛けて、煙草を一服吸つて、立ち上つて、厚い統計書と地図と案内記と地理書とを本箱から出して、さて静かに昨日の続きの筆を執り始めた。けれど二、三日来、頭脳がむしゃくしゃしているので、筆が容易に進まない。一行書いては筆を留めてそのことを思う。また一行書く、また留める、また書いてはまた留めるという風。そしてその間に頭脳に浮んで来る考えはすべて断片的で、猛烈で、急激で、絶望的の分子が多い。ふとどういう連想か、ハウプトマンの「寂しき人々」を思い出した。こうならぬ前に、この戯曲をかの女の日課として教えてやろうかと思つたことがあつた。ヨハンネス・フォケラートの心事と悲哀とを教えてやりたかつた。この戯

曲をかれが読んだのは今から三年以前、まだかの女のこの世にあることをも夢にも知らなかったころであつたが、そのころからかれは淋しい人であつた。あえてヨハンネスにその身を比そうとはしなかつたが、アンナのような女がもしあつたなら、そういう悲劇に陥るのは当然だとしみじみ同情した。今はそのヨハンネスにさえなれぬ身だと思つて長嘆した。

さすがに「寂しき人々」をかの女に教えなかつたが、*ツルゲネーフの「ファースト」という短篇を教えたことがあつた。洋燈の光明らかなる四畳半の書齋、かの女の若々しい心は色彩ある恋物語に憧れ渡つて、表情ある眼はさらに深い深い意味をもつて輝きわたつた。ハイカラな庇髪、櫛、リボン、洋燈の光線がその半身を照らして、一卷の書籍に顔を近く寄せると、言うに言われぬ香水のかおり、肉のかおり、女のかおり——書中の主人公が昔の恋人に「ファースト」を読んで聞かせる段を講釈する時には男の声も烈しく戦えた。

「けれど、もう駄目だ！」
と、かれは再び頭髪をむしつた。

二

かれは名を竹中時雄と謂つた。

今より三年前、三人目の子が細君の腹に出来て、新婚

の快楽などはとうに覚め尽したころであつた。世の中の忙しい事業も意味がなく、一生作に力を尽す勇氣もなく、日常の生活——朝起きて、出勤して、午後四時に帰つて来て、同じように細君の顔を見て、飯を食つて眠るといふ単調なる生活につくづく倦き果ててしまつた。家を引越して歩いても面白くない、友人と語り合つても面白くない、外国小説を読みあさつても満足が出来ぬ。いや、庭樹の繁り、雨の点滴、花の開落などという自然の状態さえ、平凡なる生活をしてさらに平凡ならしめるような気がして、身を置くにところは無いほど淋しかった。道を歩いて常に見る若い美しい女、出来るならば新しい恋をしたいと痛切に思つた。

三十四、五、實際このころには誰にでもある煩悶で、この年ごろに賤しい女に戯るものが多いのも、畢竟その淋しさを医すためである。世間に妻を離縁するものものこの年ごろに多い。

出勤する途上に、毎朝邂逅う美しい女教師があつた。

かれはそのころこの女に逢うのをその日その日の唯一の楽しみとして、その女についていろいろな空想を逞しゅうした。恋が成り立って、神楽坂あたりの小待合に連れ行つて、人目を忍んで楽しんだらどう……。細君に知れずに、二人近郊を散歩したらどう……。いや、それどころではない、その時、細君が懐妊しておつたから、ふ

と難産して死ぬ、その後、その女を入れるとしてどうであらう。……平気で後妻に入れることが出来るだろうかどうかなどと考えて歩いた。

神戸の女学院の生徒で、生まれは備中の新見町で、これの著作の崇拜者で、名を横山芳子という女から崇拜の情をもって充たされた一通の手紙を受け取ったのはそのころであった。竹中古城と謂えば、美文的小説を書いて、多少世間に聞えておったので、地方から来る崇拜者湯仰者の手紙はこれまでも随分多かつた。やれ文章を直してくれの、弟子にしてくれのと一々取り合つてはいられなかつた。だからその女の手紙を受け取つても、別に返事を出そうとまでその好奇心は募らなかつた。けれど同じ人の熱心なる手紙を三通まで貰つては、さすがの時雄も注意をせずにはおられなかつた。年は十九だそうだが、手紙の文句から推して、その表情の巧みなのは驚くべきほどで、いかなることがあつても先生の門下生になつて、一生文学に従事したいとの切なる願望。文字は走り書きのすらすらした字で、よほどハイカラの女らしい。返事を書いたのは、例の工場の二階の室で、その日は毎日の課業の地理を二枚書いて止して、長い数尺に余る手紙を芳子に送つた。その手紙には女の身として文学に携わることの不心得、女は生理的に母たるの義務を尽さなければならぬ理由、処女にして文学者たるの危険などを縷々

として説いて、幾らか罵倒的の文辞をも陳べて、これならもう愛想をつかして断念してしまふであらうと時雄は思つて微笑した。そして本箱の中から岡山県の地図を捜して、阿哲郡新見町の所在を研究した。山陽線から高梁川の谷を遡つて奥十数里、こんな山の中にもこんなハイカラの女があるかと思うと、それでも何となくなつかしく、時雄はその附近の地形やら山やら川やらを仔細に見た。

で、これで返辞をよこすまいと思つたら、それどころか、四日目にはさらに厚い封書が届いて、紫インキで、青い罫の入つた西洋紙に横に細字で三枚、どうか将来見捨てずに弟子にしてくれという意味が返す返すも書いてあつて、父母に願つて許可を得たならば、東京に出て、しかるべき学校に入つて、完全に忠実に文学を学んで見たいとのことであつた。時雄は女の志に感ぜずにはいられなかつた。東京でさえ——女学校を卒業したものでさえ、文学の価値などはわからぬものなのに、何もかもよく知っているらしい手紙の文句、早速返事を出して師弟の関係を結んだ。

それからたびたびの手紙と文章、文章はまだ幼稚な点はあるが、癖のない、すらすらした、将来発達の見込みは十分にあると時雄は思った。で一度は一度よりだんだん互いの氣質が知れて、時雄はその手紙の来るのを待つ

ようになった。ある時などは写真を送れと言ってやろうと思つて、手紙の隅に小さく書いて、そしてまたこれを黒々と塗つてしまった。女性には容色というものが是非必要である。容色のわるい女はいくら才があつても男が相手にしない。時雄も内々胸の中で、どうせ文学をやろうというような女だから、不容色に相違ないと思つた。けれどなるべくは見られるくらいに女であつて欲しいと思つた。

芳子が父母に許可を得て、父に伴れられて、時雄の門を訪うたのは翌年の二月で、ちょうど時雄の三番目の男の児の生まれた七夜の日であつた。座敷の隣の室は細君の産褥で、細君は手伝いに來ている姉から若い女門下生の美しい容色であることを聞いて少なからず懊惱した。姉もああいう若い美しい女を弟子にしてどうする気だろうと心配した。時雄は芳子と父とを並べて、縷々として

文学者の境遇と目的とを語り、女の結婚問題についてあらかじめ父親の説を叩いた。芳子の家は新見町でも第三とは下らぬ豪家で、父も母も厳格なる基督教信者、母はことにすぐれた信者で、かつては同志社女学校に学んだこともあるという。総領の兄は英国へ洋行して、帰朝後は某官立学校の教授となつてゐる。芳子は町の小学校を卒業するとすぐ、神戸に出て神戸の女学院に入り、そこでハイカラな女学校生活を送つた。基督教の女学校は他

の女学校に比して、文学に対してすべて自由だ。そのころこそ「魔風恋風」や「金色夜叉」などを読んで、ほんとの規定も出ていたが、文部省で干渉しない以前は、教場でさえなくば何を読んでも差支えなかつた。学校に附属した教会、そこで祈禱の尊いこと、クリスマス晩の面白いこと、理想を養うということの味をも知つて、人間の卑しいことを隠して美しいことを標榜するといふ群の仲間となつた。母の膝下が恋しいとか、故郷が懐かしいとかいふことは、来た当座こそ切実に辛く感じもしたが、やがては全く忘れて、女学生の寄宿生活をこの上なく面白く思うようになった。おいしい南瓜を食べさせないと言つては、お鉢の飯に醬油を懸けて、賄方を酷めたり、舎監のひねくれた老婦の顔色を見て、陰陽に物を言つたりする女学生の群の中に入つては、家庭に養われた少女のように、單純に物を見ることがどうして出來よう。美しいこと、理想を養ふこと、虚栄心の高いこと——こういう傾向をいつとなしに受けて、芳子は明治

の女学生の長所と短所とを遺憾なく備えていた。少くとも時雄の孤獨なる生活はこれによつて破られた。昔の恋人——今の細君。かつては恋人には相違なかつたが、今は時勢が移り変つた。四、五年來の女子教育の勃興、女子大学の設立、庇髮、海老茶袴、男と並んで歩くのをはにかむようなものは一人もなくなつた。この世の

中に、旧式の丸髻、泥鵬のような歩きぶり、温順と貞節とよりほかに何物をも有せぬ細君に甘んじていることは時雄には何よりも情けなかった。路を行けば、美しい今様の細君を連れての睦まじい散歩、友を訪えば夫の席に出て流暢に会話を賑やかす若い細君、ましてその身が骨を折って書いた小説を読もうでもなく、夫の苦悶煩悶には全く風馬牛で、子供さえ満足に育てれば好いという自分の細君に対すると、どうしても孤独を叫ばざるを得なかつた。「寂しき人々」のヨハンネスとともに、家妻というものの無意味を感じずにはいられなかつた。これが——この孤独が芳子によって破られた。ハイカラな新式な美しい女門下生が、先生！先生！と世にも豪い人のように渴仰して来るのに胸を動かさずに誰がいられようか。

最初の一月ほどは時雄の家に仮寓していた。華やかな声、艶やかな姿、今までの孤独な淋しいかれの生活に、何らの対照！産褥から出たばかりの細君を助けて、靴下を編む、襟巻を編む、着物を縫う、子供を遊ばせるという生き生きした態度、時雄は新婚当座に再び帰ったような気がして、家門近く来るとそそのるように胸が動いた。門をあけると、玄関にはその美しい笑顔、色彩に富んだ姿、夜も今までは子供とともに細君がいきたなく眠ってしまつて、六畳の室にいたずらに明らかな洋燈も、かえ

って侘しさを増すの種であつたが、今はいかに夜更けて帰つて来ても、洋燈の下には白い手が巧みに編物の針を動かして、膝の上に色ある毛糸の丸い玉！賑やかな笑い声が牛込の奥の小柴垣の中に充ちた。

けれど一月ならずして時雄はこの愛すべき女弟子をその家に置くことの不可能なのを覺つた。従順なる家妻はあえてそのことに不服をも唱えず、それらしい様子も見せなかつたが、しかもその気色は次第に悪くなった。限りなき笑い声の中に限りなき不安の情が充ち渡つた。妻の里方の親戚間などには現に一問題として講究されつつあることを知つた。

時雄は種々に煩悶した後、細君の姉の家——軍人の未亡人で恩給と裁縫とで暮している姉の家に寄寓させて、そこから麴町の某女塾に通学させることにした。

三

それから今回の事件まで一年半の年月が経過した。

その間二度芳子は故郷を省した。短篇小説を五種、長篇小説を一種、その他美文、新体詩を数十篇作つた。某女塾では英語は優等の出来で、時雄の選択で、ツルゲネーフの全集を丸善から買った。初めは、暑中休暇に帰省、二度目は、神経衰弱で、時々癩のような痲癩を起すので、しばし故山の静かなところに帰つて休養する方が好いと